

相互法則と重さ1の保型形式について

神戸大理 平松 豊一 (Toyokazu Hiramatsu)

大阪府大 石井 伸郎 (Noburo Ishii)

神戸大理 味村 良雄 (Yoshio Mimura)

§0. 序

多項式 $f(x) = x^4 - 12$ について、 $f(x) \bmod p$ が相異なる一次式の積になるような素数 p の集合を $\text{Spl}\{f(x)\}$ と書く。これは次のように特徴づけられる：

$$\text{Spl}\{f(x)\}$$

$$= \{p : \text{素数} \mid p = a^2 + 36b^2\}$$

$$= \{p : \text{素数} \mid p = (6c+1)^2 + 12d^2, c \equiv d \pmod{2}\}$$

$$= \{p : \text{素数} \mid 2p = 3(2k+1)^2 - (6l+1)^2, k \equiv l \pmod{2}\}.$$

一方、この $\text{Spl}\{f(x)\}$ は、重さ1の cusp form $\eta(12\tau)^2$ の Fourier 係数 $a(p)$ で決まり ($\eta(\tau)$ は Dedekind の η 関数)，次のようになる：

$$\text{Spl}\{f(x)\} = \{p : \text{素数} \mid a(p) = 2\}.$$

上の三つの条件は、 $\eta(12\tau)^2$ の三つの表現に対応している：

$$\begin{aligned}
 \eta(12\tau)^2 &= \frac{1}{2} \sum_{a,b} (-1)^b q^{a^2+9b^2} \quad ((a,3)=1, a \not\equiv b \pmod{2}) \\
 &= \sum_{c,d} (-1)^{c+d} q^{(6c+1)^2+12d^2} \\
 &= \sum_{k,l} (-1)^{k+l} q^{\frac{3(2k+1)^2-(6l+1)^2}{2}} \quad (k \geq l).
 \end{aligned}$$

ところで、この最後の等式は、Kac-Moody の Lie 環の方から Kac-Peterson [3] により、与えられたものである。また、今の場合、 $\text{Spl}\{f(x)\}$ は、式の形からみて、法 ℓ に関して 12 が 4 乗剰余となる素数 ℓ の集合ともみることができる。

このように、ある多項式については、その Spl が三つの同値な条件で決まり、それはまた、重さ 1 の cusp form の三つの表現（2つは definite 型、1つは indefinite 型）に關係し、さらに、4 乗剰余とも関連する。以下では、この事情を、整数論的に解明し、Kac-Peterson によって与えられた残りの等式を説明し、新しい等式を付け加えよう。最後に、相互法則との関連についても少しく述べる。

§ 1.

実2次体 $F = \mathbb{Q}(\sqrt{D})$ (D は平方因子を含まない正整数) をとり、その整数環を \mathcal{O}_F とする。 \mathcal{O}_F の ambig な整イデアル \mathfrak{f} を法とする狭義 ray class 群を $H_F(\mathfrak{f})$ とかく。 \mathcal{O}_F の单数群を \mathcal{O}_F^\times として

(仮定1) 任意の純正な単数 ε に対して, $\varepsilon + 1 \not\equiv f$.

のもとで, $H_F(f)$ の指標 χ で次をみたすものが存在する:

$$\chi((x)) = \operatorname{sgn} x \quad (\text{又は } \operatorname{sgn} x')$$

$$\forall x \in \mathcal{O}_F, x \equiv 1 \pmod{f}$$

この χ について F の L 関数が定まる:

$$L_F(s, \chi) = \sum_{C \in H_F(f)} \chi(c) \sum_{\alpha \in C, \alpha \in \mathcal{O}_F} N\alpha^{-s}.$$

K を F 上の極大狭義 ray class field とする。

(仮定2) $[H_F(f) : H_F(f)_0] = 2$

$$\text{ただし, } H_F(f)_0 = \{c \in H_F(f) \mid c = c'\},$$

のもとで, 虚2次体 k で, K が k 上アーベル拡大となるものが存在する。 K/k に対応する類群の指標で, χ からきまるものを $\tilde{\chi}_x$ とおくとき,

$$L_F(s, \tilde{\chi}) = L_k(s, \tilde{\xi}_x)$$

となる。ここで, $\tilde{\chi}$, $\tilde{\xi}_x$ はそれぞれ, χ , ξ_x からきまる原始指標であり, $L_k(s, \tilde{\xi}_x)$ は, k の L 関数である。(以上については Shintani [4] を参照されたい。)

以下, これら $L_F(s, \tilde{\chi})$, $L_k(s, \tilde{\xi}_x)$ を実際に書き下すことになる。

先ず, F について考える。上の仮定から,

$$\mu \in \mathcal{O}_F, \mu < 0, \mu' > 0, \mu \equiv 1 \pmod{f}$$

となる μ が存在し、単項イデアル (μ) を含む ray class を K と書くことにして、

$$H_F(f) = R \cup R\mu \cup R\mu' \cup R\mu\mu'$$

となる。ここで、 R は $H_F(f)/\langle \mu\mu' \rangle$ の完全代表系である。
したがって、

$$L_F(s, \chi) = \sum_{\sigma \in R} \chi(\sigma) \sum_{\alpha} (\operatorname{sgn} \alpha) (N\alpha/N\sigma)^{-s},$$

ただし、 σ_α は σ^{-1} に属する整イデアル、 $p_\alpha \in \sigma_\alpha$, $p_\alpha \equiv 1 \pmod f$ 。 α は、 O_F/E_f^+ , $N\alpha > 0$, $\alpha \equiv p_\alpha \pmod{\sigma_\alpha f}$, を走る。ここで、 $E_f^+ = \{\varepsilon \in O_F^\times \mid \varepsilon \gg 0, \varepsilon \equiv 1 \pmod f\}$ 。

この式を、逆 Mellin 変換して、

$$\theta_F(\tau) = \sum_{\sigma \in R} \chi(\sigma) \theta(QD_1\tau; p_\sigma, \sigma_\alpha, f)$$

を得る。ただし、 $f = Qf_1$, $f_1 | \sqrt{D}$, $D_1 = Nf_1$, Q : 正整数、
また、 $\theta(\tau; p, \sigma, f) = \sum_{\alpha} (\operatorname{sgn} \alpha) q^{N\alpha/N\sigma \cdot QD_1}$
とくに、 $f_1 = \sqrt{D}$ なら、この θ は、Hecke の定義した indefinite theta 関数となる [1, 2]。

次に k で考える。ここで K/k は巡回核大とし、その導手を γ とすると、 $H_k(\gamma)/C = \langle \lambda \rangle$, $\lambda^{+m} = 1$, とおく (C は、
 K に対応する類群)。 χ からきまる $\operatorname{Gal}(K/\mathbb{Q})$ の表現の
 $\operatorname{Gal}(K/k)$ への制限は $\xi_x + \xi'_x$ と直和に分解し、 ξ を ξ_x
あるいは ξ'_x として、 k の L 関数 $L_k(s, \xi)$ は次の形にかけ
る：

$$\begin{aligned} L_k(\lambda, \xi) &= \sum_{\alpha \in \Theta_k} \xi(\alpha) N\alpha^{-\rho} = \sum_{j=0}^{m-1} \xi(\lambda)^j \sum_{\alpha \in \lambda^j} N\alpha^{-\rho} \\ &= \sum_{j=0}^{m-1} \xi(\lambda^2)^j \left\{ \sum_{\alpha \in \lambda^{2j}} N\alpha^{-\rho} - \sum_{\alpha \in \lambda^{2j+2m}} N\alpha^{-\rho} \right\}. \end{aligned}$$

再び逆 Mellin 変換して

$$\theta_k(\tau) = \sum_{j=0}^{m-1} \xi(\lambda^2)^j \{ \theta_{2j}(\tau) - \theta_{2j+2m}(\tau) \}$$

$$\text{ただし, } \theta_j(\tau) = \sum_{\alpha \in \lambda^j} q^{N\alpha}.$$

ここで、更に、 K/\mathbb{Q} は dihedral 扩大であるとすると、 $m = 1, R = \{1\}$ となり、

$$\theta_F(\tau) = \theta(QD_1\tau; 1, \theta_F, f) = \frac{1}{t} \vartheta_{\pm}(QD_1\tau; \rho, Q\sqrt{D})$$

$$\text{ただし, } \pm N\rho > 0, f\rho = (Q\sqrt{D}), t = [E_f^+ : E_{Q\sqrt{D}}^+]$$

ϑ_{\pm} は Hecke のテータ関数。

$$\theta_k(\tau) = \theta_0(\tau) - \theta_2(\tau)$$

を得る。すなわち、

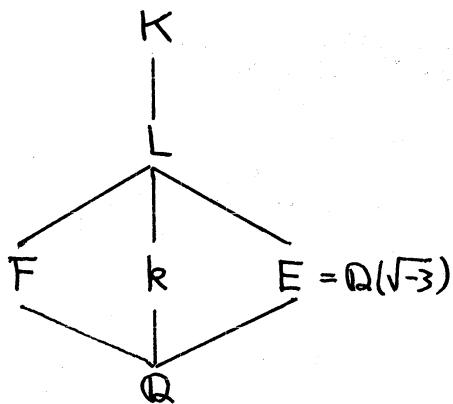
$$\text{Prop. } \frac{1}{t} \vartheta_{\pm}(QD_1\tau; \rho, Q\sqrt{D}) = \theta_0(\tau) - \theta_2(\tau).$$

§ 2. 例

以下では、 F, k を具体的に与える。

例 1. $F = \mathbb{Q}(\sqrt{3})$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $K = k(\sqrt[4]{12})$

$$f = (2\sqrt{3}), \quad \mathfrak{c} = (6)$$



$$H_F(f) = \{1, \mu, \mu', \mu\mu'\}$$

$$H_L(E) = \{1, \lambda, \lambda^2, \lambda^3\}$$

$$\mu = (7 - 6\sqrt{3}), \lambda = (2 + \sqrt{-1})$$

$$\varepsilon = 2 + \sqrt{3}, \varepsilon^2 \equiv 1 \pmod{f}$$

(i) $\theta_k(\tau)$ について。

$\sigma \in \{1, \lambda^2\}$ のとき, $\sigma = (\alpha)$, $\alpha = a + 3b\sqrt{-1}$, $(a, 3) = 1$, とかけるが, 更に,

$$\begin{cases} (\alpha) \in 1 \iff a \equiv 1, b \equiv 0 \pmod{2} \\ (\alpha) \in \lambda \iff a \equiv 0, b \equiv 1 \pmod{2} \end{cases}$$

とたゞから

$$\begin{aligned} \theta_k(\tau) &= \frac{1}{2} \sum_{a,b} (-1)^b q^{a^2 + 9b^2} && (a, 3) = 1, a \not\equiv b \pmod{2} \\ &= \gamma (12\tau)^2 \end{aligned}$$

(ii) $\theta_F(\tau)$ について。

$$\begin{cases} \sigma \in 1 \iff \sigma = (\alpha), \alpha \equiv 1 \pmod{f}, \alpha \gg 0 \\ \sigma \in \mu\mu' \iff \sigma = (\alpha), \alpha \equiv -1 \pmod{f}, \alpha \gg 0 \end{cases}$$

とたゞので, $\alpha = x + 2\sqrt{3}y \gg 0$, $x \equiv \pm 1 \pmod{6}$ とて,

$$\begin{cases} (\alpha) \in 1 \iff x \equiv 1 \pmod{3} \\ (\alpha) \in \mu\mu' \iff x \equiv -1 \pmod{3} \end{cases}$$

とたゞ。

$$\alpha \varepsilon^{\pm 2} = (7x \pm 24y) + (14y \pm 4x)\sqrt{3}$$

だから、 α の動く基本領域として、 $7x \pm 24y \geq x$ 、則ち、
 $x \geq 4|y|$ をとることができて、

$$\theta_F(\tau) = q + (12\tau; 1, \sqrt{12}) = \sum \left(\frac{x}{3} \right) q^{x^2 - 12y^2}$$

ただし、 $x \geq 4|y|$, $(x, 6) = 1$,

を得る。今、Kac-Peterson の等式を得るために、 θ_F の別の表現を考える。 $\beta \in \theta_F$, $\beta > 0$ として、

$$\theta_F(\tau) = \sum_{\beta} (\operatorname{sgn} \beta) q^{N\beta/Np}$$

ただし、 β は、 θ_F/E_7^+ , $N\beta \cdot Np > 0$, $\beta \equiv p \pmod{p}$, を走る。

ここで、 $p = 1 + \sqrt{3}$ ととり、 $\beta = x \pm y\sqrt{3}$, (\pm は $\operatorname{sgn} \beta$ と同じ) とおく。 $\beta > 0$ のとき、 $y > 0$, $x \equiv 1 \pmod{6}$, $x \equiv y \pmod{4}$ となり、 $x = 6l + 1$, $y = 2k + 1$ となると $k \equiv l \pmod{2}$ を得る。

$$\beta \varepsilon^{\pm 2} = (7x \pm 12y) + (7y \pm 4x)\sqrt{3}$$

だから、 β の動く基本領域として、 $7y \pm 4x \geq y$, すなはち、
 $3y \geq 2|x|$, 結局 $k \geq 2|l|$ がとれる。 $\beta < 0$ のときも、
 同様であるが、 $k \not\equiv l \pmod{2}$ となる。つまり、 $\operatorname{sgn} \beta = (-1)^{k+l}$ となり、

$$\theta_F(\tau) = \sum_{k \geq 2|l|} (-1)^{k+l} q^{\frac{3(2k+1)^2 - (6l+1)^2}{2}}$$

となる。これは、Kac-Peterson の得たものである。

なお、もう一つの2次体Eについても、kのときと同じよ

うにいて

$$\theta_E(\tau) = \sum_{c,d} (-1)^{c+d} q^{(6c+1)^2 + 12d^2} = \gamma(24\tau) \theta_0(24\tau)$$

が得られる。(K/E は導手 $(4\sqrt{-3})$ をもつ)

例 2. $F = \mathbb{Q}(\sqrt{2})$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-2})$, $K = k(\sqrt{\varepsilon})$, $E = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$

$$f = (4), \quad \mathfrak{l} = (4) \quad \varepsilon = 1 + \sqrt{2} \quad (4(1 + \sqrt{-1}))$$

$$\theta_k(\tau) = \sum (-1)^n q^{(4m+1)^2 + 8n^2} = \gamma(8\tau) \gamma(16\tau)$$

$$\theta_F(\tau) = \sum_{n \geq 3|m|} (-1)^n q^{(2n+1)^2 - 32m^2} = \vartheta_+(8\tau; 2 + \sqrt{2}, 2\sqrt{8})$$

$$\theta_E(\tau) = \sum (-1)^{m+n} q^{(4m+1)^2 + 16n^2}$$

例 3. $F = \mathbb{Q}(\sqrt{5})$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-5})$, $E = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $K = k(\sqrt{\varepsilon})$

$$f = (4), \quad \mathfrak{l} = (2) \quad (10), \quad \varepsilon = \frac{1 + \sqrt{5}}{2}$$

$$\theta_k(\tau) = \sum (-1)^{m+n} q^{\frac{(6n+1)^2 + 5(6m+1)^2}{6}} = \gamma(4\tau) \gamma(20\tau)$$

$$\theta_F(\tau) = \sum_{2k \geq l \geq 0} (-1)^k q^{\frac{5(2k+1)^2 - (2l+1)^2}{4}} = \frac{1}{2} \vartheta_+(4\tau; \frac{5 + \sqrt{5}}{2}, 4\sqrt{5})$$

例 4. $F = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-7})$, $K = k(\sqrt{\alpha})$

$$f = (\alpha), \quad \mathfrak{l} = (3) \quad \alpha = \frac{3 + \sqrt{21}}{2}$$

$$\theta_k(\tau) = \sum (-1)^{m+n} q^{\frac{(6m+1)^2 + 7(6n+1)^2}{8}} = \gamma(3\tau) \gamma(21\tau)$$

$$\theta_F(\tau) = \sum_{\substack{x \geq \tau |y| \\ x \equiv y \pmod{2}}} \left(\frac{-x}{3} \right) q^{\frac{x^2 - 21y^2}{4}} = \frac{1}{2} \vartheta_+(3\tau; \frac{7 + \sqrt{21}}{2}, \sqrt{21})$$

注1. 上の例1~3は, Kac-Peterson [3] によって見い出された等式である。

注2. $\eta(\tau)\eta(23\tau), \eta(2\tau)\eta(22\tau), \eta(6\tau)\eta(18\tau)$ は D_3 型であり, 従って, indefiniteテータ級数で表わされない。

注3. 例2からの等式

$$\sum (-1)^n q^{(4m+1)^2 + 8n^2} = \sum (-1)^{m+n} q^{(4m+1)^2 + 16n^2}$$

は, 2の4乗剰余に対する Gauss の2つの判別条件の同値性の一般化を与えている。判別条件そのものは, 類体 K の代りに, $K' = \mathbb{Q}(\sqrt{-1}, \sqrt{2})$ をとて, 得られる。

§3. Higher Reciprocity Law

Spl に関する仮定1, 2を満たす実2次体 F をとる。§1のとおり, 虚2次体 k があって, F と k に対する L 関数が一致する。 K/k が巡回拡大, K/\mathbb{Q} が dihedral 拡大とする。 $f(x)$ を, 実2次体 F を通しての K/\mathbb{Q} の定義多項式' (有理整係数) とする。次を得る。

定理 $Spl \{f(x)\} = \{p : \text{整数} \mid p + \Delta_f, \alpha(p) = 2\}$

ただし, f の判別式を Δ_f , $\alpha(p)$ は, F に対する Hecke の indefinite modular form $\theta_F(\tau)$ の p 番目の Fourier 係数である。

$$(証) \quad \theta_k(z) = \sum_{\alpha \in \Theta_k} \xi(\alpha) q^{N\alpha} = \sum b(n) q^n$$

とおく。 k の素イデアルで、 K/k で不分岐なもののアをとる。

次が成り立つ。 $(L = F \cdot k)$ 。

$$(i) \quad \xi(\beta) = 1 \iff \beta \in (1) \iff \beta \text{ は } K \text{ で完全分解する}.$$

$$(ii) \quad \xi(\beta) = -1 \iff \beta \in \lambda^2 \iff \beta \text{ は } L/k \text{ で完全分解し, } K/L \text{ で精性的}$$

$$(iii) \quad \xi(\beta) = i_{\alpha_0} - i \iff \beta \in \lambda \alpha_0 \lambda^3 \iff \beta \text{ は } K/k \text{ で精性的}.$$

β を有理素数で、 k で $\beta = \alpha\beta'$, $\beta \neq \beta'$, とする。このとき、

$$\beta \in (1) \iff b(\beta) = 2$$

である。 $F(x)$ を K/k の定義多項式（有理整数係数）とする。

あきらかに

$$Spl \{ F(x) \} = \{ p : \text{素数} \mid b(p) = 2, p \nmid \Delta_F \}$$

である。他方、

$$Spl \{ f(x) \} \cup \{ p : \text{素数} \mid p \text{ は不分岐, } p \nmid \Delta_f \}$$

$$= Spl \{ F(x) \} \cup \{ p : \text{素数} \mid p \text{ は不分岐, } p \nmid \Delta_F \}$$

であり、Prop. より $a(p) = b(p)$ であるから、

$$Spl \{ f(x) \} = \{ p : \text{素数} \mid a(p) = 2, p \nmid \Delta_f \}$$

を得る。 Q.E.D.

§2 の例 1 をとりあげる。 K/k の定義多項式として、

$$F_1(x) = x^4 - 12 \quad \text{または, } F_2(x) = x^4 - 6x^2 - 3$$

をとる。他方、 K/F の定義多項式

$$f_1(x) = x^4 - 4(1+\sqrt{3})x^2 + 4(2+\sqrt{3})^2$$

から、

$$f(x) = f_1(x) f_1(x)' = x^8 - 8x^6 + 24x^4 + 160x^2 + 16$$

とおくと、

$$\begin{aligned} \text{Spl}\{F_1(x)\} &= \text{Spl}\{F_2(x)\} = \text{Spl}\{f(x)\} \\ &= \{p: \text{素数} \mid a(p) = 2\} \\ &= \{p: \text{素数} \mid p = u^2 + v^2, u \equiv 0 \pmod{6}\}, \end{aligned}$$

たゞ、

$$\Theta_F(\tau) = \vartheta_+ (12\tau; 1, \sqrt{12}) = \sum a(n) q^n.$$

注) Spl だけでなく、定理の f について次が言える。

(i) $f(x) \pmod{p}$ が相異なる 2 つの 4 次多項式の積でかけ
る $\Leftrightarrow a(p) = 0, a(p^2) = -1$

(ii) $f(x) \pmod{p}$ が相異なる 4 つの 2 次多項式の積でかけ
る $\Leftrightarrow \begin{cases} a(p) = -2 \\ \text{又は } a(p) = 0, a(p^2) = 1. \end{cases}$

参考文献

- [1] E. Hecke, Über einen neuen Zusammenhang zwischen elliptischen und indefiniten quadratischen Formen, Mathematische Werke,

- Vandenhoeck und Reprecht, Gottingen, 1959, pp.418-427.
- [2] E.Hecke, Zur Theorie def elliptischen Modulfunktionen, Ibid., pp.428-460.
- [3] V.G.Kac and Peterson, Infinite-dimensional Lie algebras, theta functions and modular forms (preprint).
- [4] T.Shintani, On certain ray class invariants of real quadratic fields, J.Math.Soc.Japan 30 (1978), pp.139-167.